特集

造る人と博物館

博物館が収蔵・蓄積している資料や情報は、創作活動にどのようにかかわるのか。「インスピレーションの源泉、あるいは創造の場」としての博物館の役割、可能性を考える。

未来のデザイナーを育てる博物館

野林 厚志（のばやし あつし）
民博 文化資源研究センター

次世代育成のためのコンテスト

民博では二〇一六年八月から一〇月にかけて、台湾原住民族（台湾の先住民族の総称）の文化や歴史を表現したポスター作品を紹介する企画展「台湾原住民族をめぐるイメージ」（以下、「原住民族ポスター展」）を実施した。これらのポスターは、民博が学術協力協定を締結している順益台湾原住民博物館（順益博物館）において、二〇〇六年より隔年で開催している学生ポスターコンテストに応募され入選を果たした作品である。コンテストに応募できるのは基本的には高校生から大学生までであり、台湾の将来を担う世代が、ポスターのデザインを競い合う企画となっている。

台湾は、二〇〇二年に、「挑戦二〇〇八国家発展重点計画（二〇〇二―二〇〇七）」を発表した。グローバル経済環境、デジタル社会の到来、増大する大陸中国の経済的影響のもとで、いかに台湾の競争力を強化していくかということに取り組む経済計画であり、当時の民進党政権が進めようとする台湾本土化が強く意識されたものであった。政府は推進する一〇の計画をかかげ、e世代の育成、デジタルリテラシーと英語力をもった次世代の育成についてあげられたのが、「文化創意産業発展」、いわゆる文化的創造力を産業につなげるというものであった。

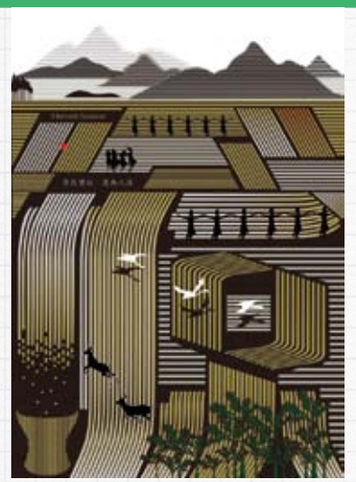
原住民族やその文化の社会における可視化の強化、デジタルコンテンツ生産の推奨、文化と産業の結合への志向性は、「原住民族ポスター展」の目的や性格に見事に合致してきたと言える。こうした時流をうまく読み取ることができたのは、順益博物館の母体が企業であるという社会の動きに敏感な環境にあったからであろうと筆者は考えている。

「祝祭の石板―豊年祭（慶典石板―豐年祭）」（作者：李翊慈、制作当時の所属：國立臺灣藝術大學）

原住民族とともに

順益博物館は、日本の自動車企業の台湾における現地代理店を中心とした企業グループがメセナ活動として一九九四年に設立した博物館である。展示、教育、研究、収蔵という四つの柱をもとにして、「大衆」と「学術」の相互的な結びつきを深めようとする理念を開館当初から考え、「DIY教室」とよばれる来館者参加型のワークショップや原住民族の集落への研修や集落との共催展示会である「部落特展」の実施等、来館者と原住民族重視の姿勢を一貫して取り続けてきた。

民博は順益博物館と二〇〇六年から学術協力協定を締結しており、二〇〇九年には民博が所蔵する資料を順益博物館で展示する、いわゆる里帰り展示となる「百年來的凝視」展を共同開催した。「原住民族ポスター展」はロンドン大学やカリフォルニア大学バークレー校で小規模な展示会を実施してきたものの、本格的な展示会を海外で開催したいという順益博物館の意向もあり、民博で開催する運びとなったのである。


「祖先の実り 祝祭の源（原民豐收, 慶典之源）」（作者：蕭妍汝、制作当時の所属：國立臺中科技大學―商業設計系）

「台湾原住民族をめぐるイメージ」展の展示風景

文化理解の場としての博物館

学生の作品とはいえ、デザインを専攻しているだけあってどの作品も創意と工夫に満ちており、鮮やかな色彩や躍動感にあふれたポスターはかなり見ごたえのある展示会にしてくれたのではないかと思っている。

もっとも、このポスターコンクールは手放しで褒められるわけではない。それはポスターを制作するうえでの課題となっている原住民族の文化や歴史について、それぞれの作者がどこまで正確な知識、理解をもって創作活動に取り組んだのかという問題である。文化や歴史について誤解していたり、知識の欠如がみてとれる作品も入選していたりする。このことは、台湾社会のなかで学生が得られる原住民族の文化や歴史、社会についての情報を反映しているとも言える。学生が原住民族、非原住民族の双方を納得させるような作品を制作するために役に立つ環境を整えることが次に求められることである。博物館はまさにそうした理解を深めるための空間にほかならない。ポスターコンクールとその展覧会は文化の理解という大きな課題に博物館が取り組むうえで、ユニークかつ有効な活動であり続けるだろう。

芸術家がとらえた微小生物

博物館と美術大学のコラボレーション

楠岡（くすおか） 泰（やすし）
滋賀県立琵琶湖博物館特別研究員

ノロ（日本最大のミジンコ）の巨大オブジェと微小生物のレリーフ。宇野先生と子どもたちとでプランクトンの模型を作るイベントにて

サイエンスとアートの出会い

小学生のころ、顕微鏡を買ってもらい、初めて家にあった水槽の藻を拡大して観て以来、この世界に魅了されている。プランクトン（浮遊生物）に代表される水中の小さな生き物たちは、陸上の生き物とは異なり、左右非対称であったり、幾何学的であったり、とても魅力的な形をしている。プランクトンの造形美をもっと一般の方に伝えられないかと考えていたが、如何せんわたしには美的センスがない。そんな折、成安造形大学の宇野君平先生と出会う機会に恵まれた。宇野さんは金属を使った造形作家で、ある日、琵琶湖博物館に滋賀県における古代製鉄について調べに来られた。そのとき、朝採れの生きたプランクトンを顕微鏡で観察できる展示に目がとまった。何か感じるものがあったのか、プランクトンの担当者に会えないかとわたしに連絡が入った。さっそく展示室に出向くとそこに熱心に質問される先生がいた。これが縁で、宇野さんはプランクトンをモチーフにした巨大な鉄のオブジェを造るようになり、また共同で「プランクトンでアート」と題して子どもたちとプランクトンを採集し、顕微鏡で観察したうえで造形物を造るイベントを開催するようになった。

マイクロアクアリウムプロジェクト

琵琶湖博物館は二〇一六年七月、リニューアルオープンした。そのひとつの目玉として、微小な生き物に焦点をあてた展示空間、マイクロアクアリウムがある。計画中、何か別の視点でミクロな生物を紹介できないかと、宇野さんに相談した。その結果、成安造形大学の学生に授業の一環として、微小生物をモチーフとしたオブジェを造ってもらい、展示したらどうかということになった。博物館内部でプロジェクトの細部を詰めていたところ、どうせなら、ミクロの世界を巨大な映像で紹介する「マイクロシアター」に壁画を描いたらどうか、とか、シアターのイスも微小生物をモチーフにデザインしたらどうか、などの意見が出て、「オブジェ・レリーフ」「壁画」「イス」を作る三つのプロジェクトを立ち上げることになった。

学生を募集したところ、七〇名ほどの履修希望者があった。まず、学生に博物館に来てもらい、自分でプランクトンや付着生物を採集し、それを顕微鏡で観察して、それぞれのお気に入りをスケッチしてもらった。次に大学で学生が作った模型やデッサンに対してそれぞれの生物の担当学芸員が意見を述べた。

実際の制作は授業履修者のなかから積極的に作品を造りたい者を募り、二〇一五年秋から実施した。イス班はイメージだけでよいが、オブジェ・レリーフ班および壁画班は細部までこだわった作品をお願いしているため、詳細な観察が必要である。問題は光学顕微鏡では重なっていて詳細がわからないことがよくある。実際に作品を仕上げる段階になると、細部に関する問い合わせのメールが次々に学生から来る。自分の専門の繊毛虫（原生生物）ならまだしも、専門以外の生物となると文献に頼るしかない。専門書を何冊もめくり、インターネットで論文を探し、やっとのことで学生に回答する。これが日に何件もあるとなかなか大変である。

博物館で微小生物を観察する学生（撮影・ロビン・スミス）

今回のプロジェクトで、博物館はこれまでにない展示を実現でき、大学は地域に対して存在感をアピールでき、学生は自然科学者という異なる人種と接する機会と、自分たちの作品が博物館に常設展示されるチャンスを得るという三方よしという結果となった。

みんぱくの路地裏探訪

映像音響資料収蔵庫編

下道（したみち） 基行（もとゆき）
民博 特別客員教員

美術家／写真家という表現者の立場で、今年から特別客員教員として民博にかかわることになった。大変光栄なことであると同時に、民博という国内にある巨大な異世界の内部を〝フィールドワーク〟できることに鼻息を荒くしている。

僕が取り組む仕事内容は「写真、動画資料の創造的な活用とアーカイブに関する研究」。つまり、博物館のその背景にある膨大な調査で撮影された写真や映像のアーカイブスの再活用を表現者という、外からの目で考察する試みである。今回はここ数カ月で見つけた写真のアーカイブスを巡る小さな風景について書いてみようと思う。

写真のなかを旅する

民博の施設内でも奥まった所に「映像音響資料収蔵庫」は存在する。温度湿度が管理され少し肌寒い室内にはハンドル式の棚が無数に並び、膨大な量の写真や映像や音響資料が収蔵されている。別の部屋では日々、白手袋をした女性がせっせとアルバムからポジフィルムなどを外し、スキャンのための下準備がおこなわれていた。写真資料のデジタル化は二〇〇〇年あたりから進められているという。

収蔵庫のなかに入り棚の端っこから、写真が丁寧にナンバリングされまとめられた束をランダムに指定し出してもらう。手伝ってくれるスタッフの女性は、写真の束を手に取る度に「あぁ〇〇年のアフリカ調査の〇〇さんかぁ。この方は……」とそれぞれの研究者の方にとても詳しく、ときに思い入れもあるようだ。写真を一枚一枚丁寧に見ていく作業は目的のない旅のようだ。特に探しているものはなく、自分のなかに余白の部分をもちながら小さな発見や疑問が引っかかってくるのを待ちながら彷徨う。目の前には何十年も前におこなわれたアフリカ調査の写真の山。人類学を学んではいない僕にとってはまったく触れたことのない世界。集落、道具、人びとの生活などの資料として意識的に撮影された写真から、調査団のベースキャンプでの風景や地元の人との交流や食事風景、特に人びとの〝別れ〟のシーンはフィールドワークでの心の交流が目に見えるようで、「研究資料」としてだけはなく、「旅写真」として心に触れるものもあった。

さまざまな箱が積まれた収蔵庫の入り口

モノがデジタル化されるとき

すでに、デジタル化された写真の一部はホームページにアップされ閲覧することもできる。

それらモニター上で見た写真と収蔵庫で見ている写真との違いに小さな発見の手応えを感じた。それは台紙やフィルムのマウントなど写真の周辺に残る手書きのメモなどの痕跡。もちろんデジタル化された写真にも文字情報は丁寧に付属されているが、写真とともに台紙／ケースと書き込みが一体になった〝モノ〟としての独特の存在感がある。

さらに写真だけではなく、〝入れ物〟に注意して改めて見ていくと、ある棚では半分ぐらいはカラフルな箱やアルバムが並んでいるのに、その途中からはすべて同じデザインの箱に移り変わっていく。同じデザインの箱はデジタル処理を終え移し替えられた保存用の中性紙箱（資料の劣化を防ぐ）だという。デジタル化によって移り変わる収蔵庫の棚の風景は、〝駅の路地裏の凸凹した有機的な町並みが徐々に真新しいマンションに開発されていく風景〟のようだと思った。

上：中性紙の箱ともともと写真が収められていた規格外の箱が棚に同居する
左：いろいろな箱を棚から出して並べてみた

空っぽの入れ物には何が宿る？

棚の端のワゴンが目にとまった。そこには、中性紙箱にまとめられた写真やフィルムが元々入っていた空き箱や袋があった。例えば、写真屋さんの情報やメモが残るフィルム現像を出したときの袋、ポジフィルムのマウントもさまざまな形と書き込みがあり、さらにフィルム入れとして使われていたクッキーの缶（「泉屋京都店」の缶はいろいろな研究者が使っていた！）など、写真やフィルムから外された〝入れ物〟たちが積まれていた。中身が生まれたときからそれを保護し、ときには移動にも耐えた容器は、さまざまな地名や人名やメモの書き込みやただの汚れや、線で消された情報すらもひとつの情報が層となり見るものに語りかけてくる。

これらの入れ物は捨てられる訳はなく保存されるのを待っているのだという。ただ、民博の場合、物は博物館の収蔵庫、フィールドノートなどは図書館、写真などはこの収蔵庫とわかれて管理保存されていることもあり、写真自体は内容は情報化され現物は映像音響資料収蔵庫に入れられるが、この文字の書かれた入れ物をどの部署でどのように扱うかは、現在宙ぶらりんな状態であり検討されている最中だという。

先日、とある博物館のアーカイブス担当の友人に、話を聞かせてもらったが、それぞれの博物館によって収蔵やいろいろな方向性の違いがあるものの、物と情報と文献（ミュージアムとアーカイブスとライブラリー）の中間領域をどうとらえ、横断的に紐付けしていくか考える時期が来ているそうだ。

「あ、そういえば、箱の転用だったら、〝茶箱〟もあるわよ。お茶は空気に触れさせないように作られているから、ある種類のフィルムの保管にぴったりなのよ。あとカセットテープの箱は……」と、〝入れ物〟という新しい視点でスタッフの方と僕は小さな発見を繰り返し盛り上がった。今回の映像音響資料収蔵庫探検は、写真的大発見などという本道ではなく、路地裏路地裏へと進んでいく結果となった。しかし、多くの研究者たちの残した膨大な足跡とともに、この収蔵庫にはまだまだ新しい発見が眠っているに違いない。

最後は布のミュージアム

岩立 広子（いわたて ひろこ）
岩立フォークテキスタイルミュージアム館長

自分の行く道は

幸運にも、ふたつ年上の姉が、わたしの女子美術大学工芸科行きを強く押してくれた。自分の気持ちに正直にねといって。経済的負担と同時に、創造的な仕事が自分にできるかどうか。しかし入学してみたら、織も染の先生も、どんなものを作っても何かしら良い所を見つけて褒めて下さり、力を合わせてやった共同制作は、逆立ちをして「すごいぞ」と喜び合った。わたしの不安は杞憂（きゆう）に終わり毎日が楽しかった。

第五回 岩立広子 染色展 於 銀座文春画廊　1962年

卒業と同時に、わたしのアルバイト先のブティックから、染色展を依頼された。気軽に引き受けたものの、実際自分でやってみると何ひとつ思う様にできず、じつは何も身についてなく、冷や汗をかきながら一人で実験を重ねた。何とか五十点くらいの服地や壁掛けができあがり、美しく飾って頂いた。見知らぬ客が珍しがって買って下さり、大半が売れて、また来年もと、信じられないオファーが来た。五、六回目は、銀座の文春画廊というわたしにとってはもったいないような立地条件で展覧会ができた。七割方売れて成功だったが、制作には大変な時間と材料費を使うため、続けていくには限界に近いものを感じた。既製品の布や衣服も安価で良いものが手に入るようになり、それに太刀打ちするには、よほどの能力のある者だけが生き残れる時代になって来た。自分の行く道をあらたに考えなくてはならなかった。

ナスカ期の土器、トウガラシの文様　1965年収集

アンデスの地で出会った傑作

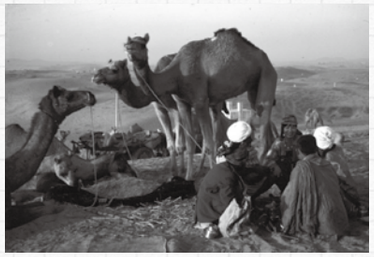
一九六五年、新しい道を求めてアンデスの地に向かうことにした。最初にNYに向かい、博物館や現地の工芸作家の活動を見た。北米先住民の織物、ビーズ細工。アンデスの出土の土器や織物はどの美術館も充実していて、至福のときを過ごしたが、現代の工芸作家の作品は活気がなく、がっかりした。

デパートの布地売り場でマリメッコの布地を見つけ、喜んで二メートル買った。その近くにあったインドの木版更紗も二メートル買った。マリメッコの布地はインド更紗の十倍の値段だったが、憧れていたし今でも大好きで、NYで出会った唯一の布だったので心底喜ん

使い古しの薄い布地を数枚重ねて、蓮文、ペーズリー、孔雀を刺繍し全体を縫いしめる
ベンガル地方のカンタ

だ。しかし、マリメッコの布地は色の彩度が違うのか、いつも他のものと融和せず、インドの布地の方が地味だがしっくりして身体になじみ、服にして長く使った。まさかこの五年後にインドに行き、四〇年も通い続けるとは思ってもいなかった。

NYのあとペルーに飛び、インカ帝国の遺跡を訪れた。発掘された土器には、縄文時代のような渦文、鳥文様などの動物文、そして花より野菜、ジャガイモ、トウモロコシ、カボチャ、ナス、トマト、ピーマン、豆類などいちばん大切な食物のすべてが活き活きと描かれていた。これらはコロンブスがアメリカ大陸に到達するまでアジアにはなかったものであり、何という人たちなのだろうと思った。そして、染織品の傑作の数々も副葬品として地中に埋葬していた。膨大な時間をかけて織り上げた不思議な、しかし素晴らしいデザインの染織品は現代の織機では不可能に思われた。これらの布を自分で再現してみようと思った。頭を柔軟にし、実際に筬（経糸を整える櫛のような道具）を使わず、時間をかけて取り組んでみた。膨大な時間はかかったがなんとかできた。どんな織り方も自由自在に入れられる。織機から完全に自由になり、人間が主役になれるのだ。ただし膨大な時間がかかる。能率を考えない。それは現代社会が失ったものである。


インド ラージャスタン州、プシュカルのラクダ市　1984年

調査、収集、そして公開へ

わたしは増々、染織の面白さに惹かれ、今度はわたしたちが住んでいるアジアをもっと知りたいと思った。一九七〇年、インド全土とネパールをまわる旅を考えた。世界美術全集からインドの全図の重要な所を拾い出し、すべてを飛行機と列車を乗り継いで一巡する旅程を立てた。幸い、インドはかつて英領だったので、どんな田舎でも誰かしら英語を話す人がいて、南米の様な不安はなかった。昔からの手仕事が雑草のように残る村々を数年かけて探し出した。染物や織物の現場を訪れると、急に自分がやっていた染物の仕事が、ちっぽけで頭でっかちな物に思われた。村の仕事は大らかで、悪くいえば大雑把だが、皆が嬉々として仕事をしていて楽しかった。

少しずつ北から南、西から東と染織の旅を続けた。九〇年代に入り、インドが経済の自由化を宣言すると、見る間に外国商品の輸入が始まり、資本の提携が一気に進んだ。テレビが入り、ケータイが普及し、崩れるように古くさいインドからモダンなインドに変身した。わたしの現地での記録も過去のものとなり貴重になってしまった。

その長年に渡る旅の記録とともに、手元に集まった八千点ほどの染織品は七年前に自ら立ち上げた「岩立フォークテキスタイルミュージアム」という安住の場所に納まり、一昨年には一般財団法人として認められた。さまざまな切り口で年に三回の展示を催し、次世代に繋げるべく広く公開している。現在は、わたしが旅で初めて出会ったアンデスの古代の織物と、それを受け継いだ中南米の現代の染織品を展示している。小さな美術館ではあるが世界中の珠玉の染織品を並べています。ぜひ観にいらしてください。

現在展示中の「アンデスの織物と中南米の衣装」展　2016年11月12日（土）まで

想像のためのスコア

バタヴィア、1658

mamoru
サウンドアーティスト

六ペンスの風
――フルートと言葉による二重想
右：mamoru
左：フルート奏者・木埜下大祐

バタヴィアの音風景

〝むせ返るような熱帯の暑い空気。遠くの空には入道雲が立ち上り、黒く低い雲が近づいている。雨が近い。区画された道の両脇にきちっと立ち並ぶ三階建ての家々。その向こうからは椰子の木々が午後のそよ風に揺れ、木の上を渡り歩く人影も見える。通りを往き、大きな角を曲がると、賑やかで騒がしい音が近づいてくる。と、同時に種々雑多な肌の色の人びとの姿が目に入り、甘ったるい香りに乗せて、果物の名か何かを売り子が歌うように連呼する。耳慣れないさまざまなことばの響きと笑い声。ここは市場。その脇にはバタヴィアの偉大な川、カリ・ベサール。川の向う岸にはオランダ人の作った大きな砦が見え、馬に乗った人びとが往来する。〟

これまで音や聴くことを取り扱った作品を作ってきたがここ五年くらいは、いろいろな資料を集め、歴史上の人物や事柄に関係する場面の音風景を書きおこし「想像のためのスコア」として発表したりしている。冒頭の文章は、一七世紀来の日蘭関係に興味を持ってあれこれと調べていた際にアムステルダムにあるトロッペン博物館で目にした「バタヴィアの風景」（一六六二年ごろ）と題された絵、当時の地図などを元に書いたものの一部だ。

聞こえてくるもの

この絵画の細部からさまざまな音を想像するために後日トロッペン博物館の東南アジア担当のピム・ウエスターカンプ氏に協力を依頼した。インドネシアをフィールドとする文化人類学者であるウエスターカンプ氏は、例えば臼の脇で棒をもちあげている人物を見つけ、現在でも伝統行事の様にしておこなわれている脱穀の様子ではないかといって動画を検索し、心地良いリズムにのって軽やかに木を打ち付け合う様子を見せて下さった。他にも「耳慣れないことば」には、当時の市場での共通語であった古いマレー語が含まれるだろうと教えて下さった。

絵画「バタヴィアの風景」、またその原画と目される「バタヴィアの市場」（1658年ごろ、アンドレアス・ベークマン）を紹介する様子

この絵の作者とされているアンドリエス・ベークマンはバタヴィア（現在のジャカルタ）で見聞きしたさまざまな事柄を他にも多々盛り込んでいる。興味深い要素のひとつに着物を着た人物がある。ベークマンは日本（出島）を訪れた可能性があり、その際に見かけた役人を参考にした可能性もあるが、東インド会社の傭兵として雇われていた侍や、迫害を受け海を渡ったキリシタンなどが当時のバタヴィアにもいた事が示唆されている。そう考えて、想像上の市場を再びめぐると、どこかから耳慣れない古い日本語も喧騒にまぎれて聞こえてくる。

※このページの写真2点ともに、国立国際美術館でのレクチャー・パフォーマンス「THE WAY I HEAR／想像のための幾つかのスコア」（2015）より。撮影・直江竜也